

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：33908

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13180

研究課題名（和文）中国における歴史的事例の学習を基盤とした道德教育実践に関する研究

研究課題名（英文）Research on China's Practices in Moral Education Based on the Teaching of Historical Events

研究代表者

原口 友輝（HARAGUCHI, Tomoki）

中京大学・教養教育研究院・教授

研究者番号：70630995

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、道德教育を中心に専門職能開発や教材の提供等の教師支援を行う非営利団体として評価の高い「歴史と私たち自身に向き合う（Facing History and Ourselves: FHAO）」が、中国でどのような専門職能開発を行ってきたか、またそれがどのような教育実践につながっているかを明らかにした。具体的には、米国での近年の展開と比較しながら、香港での二つのワークショップと南京外国語学校での英語選択コースにおける授業実践を中心に検討した。それにより、「考え、議論する道德」を展開していく際の教授方法とそのための教師支援の在り方を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「歴史と私たち自身に向き合う（Facing History and Ourselves: FHAO）」に関しては多くの先行研究があるが、我が国と地理的・文化的に近く（立場は異なるが）共通の歴史をもつ中国での展開に関してはまだ研究がされていなかった。本研究では歴史的な知識を基にした道德教育の観点から、FHAOの米国での展開と中国での展開が我が国に対して持つ意義を明らかにすることで、「考え、議論する道德」を展開していく際の教授方法とそのための教師支援の在り方について具体的に論じることができた。

研究成果の概要（英文）：This study elucidated how Facing History and Ourselves (FHAO), which is a highly reputed non-profit organization that supports teachers by offering professional development programs and teaching materials, focusing mainly on moral education, has provided professional development programs in China and how such programs have shaped the practice of education. Specifically, the author mainly examined the class practice at two workshops in Hong Kong and the class practice of the elective English course at Nanjing Foreign Language School in comparison with developments in the U.S. in recent years. Based on this, the author clarified the teaching method when deploying “Moral Education through Deliberating and Discussing” and the model of supporting teachers in the practice of such moral education.

研究分野：道德教育

キーワード：道德教育 中国 歴史的事例 教授方法 授業実践 歴史と私たち自身に向き合う カリキュラム 考え、議論する道德

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した 2018 年度は、2017 年度版の学習指導要領を受けて、特別の教科である「道徳科」が開始される時期であった。「道徳科」が開始されるにあたっては、「考え、議論する道徳」が目指されるようになった。これまで読み物教材の登場人物の「気持ち」を問い、「思いやり」や「遵法心」など一回の授業において一つの「道徳的諸価値」を教えるスタイルが一般的だった我が国の道徳の授業は、児童生徒に多面的・多角的に考えさせるものへと転換が求められていた。

一方で、これまでの我が国の道徳教育においては、「道徳的諸価値」を授業で教えるべき「内容」として位置付けてきたために、授業で取り上げたい「価値」に関わらない側面が捨象され、授業自体が一面的・断面的にならざるを得ないという課題があった(原口 2014)。「考え、議論する道徳」を展開していくにあたり、児童生徒に多面的・多角的に考えさせるためには、考えさせるための土台となる具体的な知識について取り上げていく必要がある。

このように道徳の授業においてどのような知識をどう教えるべきかという問題に関して、筆者は本研究をスタートする前から米国を拠点とする教育系非営利団体「歴史と私たち自身に向き合う (Facing History and Ourselves)」(以下 FHAO)の活動に注目し、その教授法や教材などの特徴を考察してきた。FHAO は中学生以上を対象に、ホロコーストなどの大規模な暴力の歴史的事例を取り上げ、生徒が考え判断する道徳教材や教授法の開発を行ってきた団体である。その際、FHAO は、加害者、被害者、傍観者など、歴史的事例の中の多様な立場の人々の行動に焦点をあて、「かれらがなぜそのような選択をしたのか」「そこに働いていた要因は何なのか」を考えさせるという方法をとる(原口 2007, 2010)。すなわち行動のもつ「価値」よりも「人間の行動」それ自体に焦点をあてる。また、FHAO は「比較アプローチ」と名付けられるものを使用する。これは、たとえば米国や南アフリカにおいてホロコーストという距離のある事例を用いて人間の行為について探求させるという方法である。これにより学習者は、より冷静に自分達の歴史と差別や暴力などの身近な問題に向き合えるようになる(原口 2010, 2015)。

このように人間の行動に焦点をあて、自分たちの歴史と身近な問題に向き合わせるという手法は、多面的・多角的に考えさせる「考え、議論する道徳」を目指す我が国においても有効であると考えられた。また FHAO の手法や教材については多くの評価がなされてきており(例えば Barr *et al.*, 2015)、信頼できるものであった。しかし FHAO の手法を我が国の文脈にどのように適用するかについてはさらなる検討が必要であった。

一方、FHAO は 2007 年以降、「チャイナ・プロジェクト」と呼ばれるプロジェクトを展開し、中国に関連する資料集とティーチングガイドの開発や専門職能開発を行ってきた。また、2016 年 4 月には「南京大虐殺から戦争犯罪を探る」、2017 年 4 月には「東アジアにおける第二次世界大戦を教える」というオンラインセミナーが開催されていた。2017 年の段階で中国国内・香港の少なくとも 17 の学校に FHAO プログラムが導入されていた。さらに、これまで FHAO の中心となってきた資料集『ホロコーストと人間の行動』(FHAO, 2017)が 2017 年夏に 23 年ぶりに改訂され、FHAO 実践及び研究が新たな段階を迎えている時期でもあった。

2. 研究の目的

上記の FHAO の新しい展開、とりわけ中国での活動に注目し、本研究は以下の点を明らかにすることを目的とした。

- (1)近年の FHAO の取り組みの特徴は何か。特に本拠地の米国ではどのような取り組みが行われているのか。
- (2)中国ではどのような専門職能開発が行われているのか。米国との違いは何か。また、なぜ中国において FHAO の手法が取り入れられるようになったのか。
- (3)中国では、FHAO の手法・教材に基づいてどのような授業実践が行われているのか。どのような教材が、何を教えるために、どう用いられているのか。

これらの検討を通じて、どのような歴史的知識をどう教えることが「考え、議論する道徳」につながるのか、またそのための教師支援はどうあるべきかを明らかにする。

3. 研究の方法

以上の目的を達するために、米国と中国での FHAO によるワークショップの調査(参加者によるフィードバックについての分析を含む)、スタッフや教員へのインタビュー調査、学校への訪問調査を行った。上記の(1)から(3)の目的におおよそ対応して、具体的には以下の通りである。

(1)ニューヨークでのワークショップの調査及びスタッフへのインタビュー調査等

- ・ニューヨークの FHAO と連携している教員同士の交流「歴史と私たち自身に向き合うニューヨーク地域パートナー校ネットワーク・サミット」(2019 年 2 月 12 日)
- ・John Dewey High School の教員を対象としたワークショップ「南京大虐殺 (The Nanjing Atrocities)」(2019 年 2 月 14 日)
- ・『マンザナーよさらば』ワークショップ: 回想記 (memoir) を通して日系人収容を教える」(2019 年 2 月 19 日)

- ・Manhattan Early College School of Advertisement への訪問調査（2019年2月11日、13日）
 - ・オンラインセミナー「ホロコーストと人間の行動」（2020年3月19日-4月29日）
- これらに加え、本研究が開催される直前に開催されたワークショップ「アラバマ物語を教える（Teaching To Kill a Mockingbird）」（2018年3月18日-19日）の調査について、本研究の枠組みで分析、検討を行った。
- なお、2020年にFHAOの本拠地であるボストンでもワークショップや授業実践に関する調査を行う計画であったが、新型コロナウイルスの世界的拡大のため断念せざるを得なかった。

(2)香港でのワークショップの調査とインタビュー調査等

- ・ワークショップ「『南京での残虐行為』を教える」（2019年4月25日）
 - ・ワークショップ「エリ・ヴィーゼルの『夜』を教える』へのFHAOのアプローチ」（2019年4月27日）
- その他、FHAOのホームページ、アジア関連のスタッフへの対面・オンラインインタビュー、メールでのやり取りにより、「チャイナ・プロジェクト」とFHAOによるアジア関連の資料の開発について情報収集を行った。

(3)南京外国語学校におけるFHAO実践に関する調査

- ・選択科目コース（英語）に関する授業者による論文、南京外国語学校のホームページ、及び授業者とのメールでのやり取り等における教材や生徒の活動に関する情報収集
- ・生徒主体のオンライン・ディスカッション「南京からルワンダへ：歴史を記憶し未来を創造する 南京外国語学校選択科目コース『歴史と私たち自身に向き合う』の学生と河海大学ルワンダ人留学生とのオンラインミーティング」（2022年5月26日）
- ・選択科目コース（英語）の授業2コマを訪問調査（2023年10月19日）

4. 研究成果

(1)近年のFHAOの展開に関する成果

近年の米国でのFHAOの展開に関しては、上記の「アラバマ物語を教える」及び「『マンザナーよさらば』ワークショップ」の分析を中心に学会発表・寄稿というかたちで成果を公表した。ワークショップ「アラバマ物語を教える」については、分析結果と考察を2018年9月に行われた日本教育学会第77回大会で発表した後、その発表内容を発展させ、日本道德教育学会の『道德と教育』第337号（2019年）に寄稿した。そこでは、同ワークショップが小説『アラバマ物語』を用いて授業を行う際の情報を提供するワークショップであり、第一に物語教材を用いながら現実の問題を考えさせるための多様な指導方法を参加者の教師に体験させるかたちで紹介するものである点、第二に物語の背景にある歴史や多様な社会的事実を教え、文学作品を歴史的事例や現実の問題の一つとして詳細に検討させる点、第三にFHAO独自の「スコープとシークエンス」に従い教材の内容と自分たちとを結び付けて捉えさせる手法を教師自身が相互体験的に学ぶ点に特徴があることを指摘した。とりわけ、第一の物語教材を用いる点は歴史的事例を中心に取り上げてきたこれまでのFHAOの手法と異なる点であり、第三の2日間という短い期間で「スコープとシークエンス」を体験させる点も新しい展開と言える。あわせて、これらの点は教師が「考え、議論する道德」を実践するために有効な支援となることを指摘した。

「『マンザナーよさらば』ワークショップ」については、調査結果を2019年10月に行われた日本協同教育学会第16回大会で発表した後、発表内容を発展させて、日本倫理道德教育学会の機関誌『倫理道德教育研究』第4号（2021年）に寄稿した。同ワークショップはFHAOにおいて初めて米国における「日系人強制収容問題」を取り上げたものであり、内容として新しい展開であった。またその方法については、単に歴史的背景だけでなく、被害者や加害者、行動者等の選択を、知的側面だけでなく情緒的・倫理的側面をも統合して自分に引きつけて学べるような内容・方法となっており、我が国の道德科で求められている、知識・思考・実践をつなぐ授業の一つの在り方が、教師の専門職能開発を通して示されていたという点もあわせて指摘した。

その他、FHAOの手法を導入している学校同士の教師が交流する会議が開催されるなど、FHAO自体の活動と影響力が増大してきた様子もうかがえた。

(2)「チャイナ・プロジェクト」と中国・香港における専門職能開発の展開に関する成果

2007年ごろからスタートした「チャイナ・プロジェクト」の概要と2019年に香港で行われた二つのワークショップについては、2019年12月の日本倫理道德教育学会第4回大会で発表した後、(3)で後述する南京外国語学校の実践とあわせて、『教養教育研究院論叢』第2巻第2号（2022年）に寄稿した。そこではまず、FHAOによるアジア関連の資料の開発及び2018年までの専門職能開発の展開についてまとめた。アジア関連の資料の開発については、米国内でその需要があったためにスタートしたとのことであった。やがて中国本土でもワークショップを開催するよう要請があったため、2017年まで北京、南京、上海、香港でワークショップが行われてきた。しかし、2017年頃からは香港を中心に展開していく方針に変わった。その理由は、北京・南京などの諸都市が非常に大きくワークショップ後のサポートが困難であること、インター

ナショナルスクールの多い香港の方が自由や民主主義、人権等の話題を議論しやすいこと、またアジア・ソサイエティやホロコースト・トレランス・センターなど、米国内にもあって協力してくれる団体が存在することなどが理由であった。香港を中心にする方針の下で開催されたのが2019年4月に行われた以下の二つのワークショップである。

ワークショップ「『南京での残虐行為』を教える」と「エリ・ヴィーゼルの『夜』を教える」へのFHAOのアプローチは、双方ともFHAOの「スコープとシーケンス」に基づいて展開されており、多様な教授法を参加者相互に体験させるとともに、「南京大虐殺」と『夜』の背景情報や指導方法を提供するものであった。これらの点は米国でのワークショップと共通している。ファシリテーターによれば、ワークショップ内での参加者の反応や進行に関しても、ほとんど米国との違いは感じられなかったとのことであった。一方、それまでの中国本土でのワークショップとの違いについては、政治的事情もあって中国本土の方が教授法それ自体に参加者の興味を集中したのに対し、香港の方は内容や考え方にも焦点があたったとのことであった。

(3)南京外国語学校におけるFHAO実践に関する成果

中国での学校におけるFHAOプログラムの実践については、江蘇省の南京外国語学校に関する成果があげられる。同校は2010年9月から第10学年の英語の選択コースとして、週1回90分の授業を20時間程度行うFHAOプログラムを実施してきた。授業は完全に英語で行われ、受講を終えるとFHAOによる「選択コース終了証」も与えられることから、FHAO公認のコースであると言える。

このようなFHAOプログラム導入の経緯と実際の授業、生徒の学習内容等について、先述の『教養教育研究院論叢』第2巻第2号(2022年)及び『筑波大学道德教育研究』第25号(2024年)にまとめた。そこでは我が国の道德教育の観点から意義深い点として、社会科や道德関連の教科ではなく英語の教科で実践が行われている点、ホロコーストの内容のみならず南京に関する話題や「トロツク問題」などのモラルジレンマが取り上げられ、中国の生徒にとって学習が身近に感じられるように工夫されている点、過去の人びとの選択だけでなく、生徒自身の今後の選択の重要性について考えさせるものとなっている点等を指摘した。あわせて、極めて教育レベルが高い南京外国語学校における英語の選択コースという特色を踏まえ、我が国においてホロコーストや「南京事件」のような取り扱いの難しい歴史を取り上げる際、どのような形で教科間の連携を行いつつ展開していくことが考えられるかについても考察を加えた。

また、「南京事件」で有名な南京の地への訪問について、同じく『筑波大学道德教育研究』第25号(2024年)に「訪問記録」としてまとめた。

本研究は、新型コロナウイルスの世界的拡大の期間を挟んで実施された。そのため中国・香港でのFHAOによるワークショップが停止すると同時に、中国の学校へ直接訪問することができなくなり、2年間の延長を余儀なくされた。コロナ禍後も中国及び香港の政治的情況の変化によって、2019年4月のワークショップを最後に、「チャイナ・プロジェクト」の再開の目途は立っていない。これらの事情により、中国での実際の教育実践については南京外国語学校での実践のみの調査となった。

とはいえ、日本と地理的・文化的に近く、(立場は異なるが)歴史も共有している中国での実践を明らかにできた意義は大きい。今後は、本研究の成果を踏まえ、ホロコーストや「南京事件」などの取り扱いの難しい歴史を我が国の道德教育において取り上げていくために教師への支援をどのように行っていくかを解明する新たなプロジェクト「日本において『困難な歴史』を教える道德教育カリキュラムの開発とその実践への支援」(JSPS 科研費 JP22H01019)において、本研究から発展的研究として継続して取り組む予定である。

<引用文献>

- 原口友輝(2007)「人権教育の指導方法に関する一考察—『歴史と私たち自身に向き合う』プログラムの検討を中心に—」『関東教育学会紀要』第34号、関東教育学会、63-74頁。
- 原口友輝(2010)「『移行期の正義』論における教育の位置—『歴史と私たち自身に向き合う(Facing History and Ourselves)』の事例を中心に—」『教育学研究』第77巻第1号、日本教育学会、15-24頁。
- 原口友輝(2014)「歴史的事例の探究を通じた道德教育の可能性—『水晶の夜』を教える授業プランに着目して—」、『筑波大学道德教育研究』第15号、筑波大学道德教育研究会、33-42頁。
- 原口友輝(2015)「『移行期の正義』における歴史教育の可能性—参加の諸側面に注目して—」、西村春夫・高橋則夫編『修復的正義の諸相(RJ叢書9)』成文堂、285-302頁。
- Barr, D. J., Boulay, B., Selman, R. L., McCormick, R., Lowenstein, E., Gamse, B., and Leonard, M. B. (2015). "A Randomized Controlled Trial of Professional Development for Interdisciplinary Civic Education: Impacts on Humanities Teachers and Their Students," *Teachers College Record*, 117, pp.1-52.
- Facing History and Ourselves (2017). *Holocaust and Human Behavior*, Revised edition, Brookline, MA: Facing History and Ourselves National Foundation.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 原口友輝	4. 巻 25
2. 論文標題 「困難な歴史」を取り上げる道德教育実践 中国南京外国語学校英語選択コースの場合	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 筑波大学道德教育研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 原口友輝	4. 巻 2巻2号
2. 論文標題 中国における「歴史と私たち自身に向き合う」による教師への専門職能開発とそれに基づいた教育実践 歴史的事例学習を通じた道德教育を目指して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教養教育研究院論叢	6. 最初と最後の頁 11-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 原口友輝	4. 巻 4
2. 論文標題 授業において「困難な歴史」を取り扱うための教師支援に関する一考察 米国における「日本人強制収容」に関するワークショップの検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 倫理道德教育研究	6. 最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 原口友輝	4. 巻 337
2. 論文標題 「歴史と私たち自身に向き合う（Facing History and Ourselves）」によるワークショップ「アラバマ物語を教える」の検討 社会的事実に基づいて多面的・多角的に考える道德授業を目指して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 道德と教育	6. 最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34346/doutokutokyoiiku.0.337_39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 原口友輝
2. 発表標題 「困難な歴史」の観点から「現代的な課題」を取り上げる 小学校から高校までをつなぐ視点として
3. 学会等名 日本倫理道德教育学会：第8回大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 原口友輝
2. 発表標題 歴史的事例の学習を基にした「考える道德」の実現に関する考察 「歴史と私たち自身に向き合う（Facing History and Ourselves）」によるワークショップの検討を通して
3. 学会等名 日本協同教育学会：第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原口友輝
2. 発表標題 香港における「歴史と私たち自身に向き合う」による二つのワークショップの検討 「社会的事実」を教える道德教育実践を目指してー
3. 学会等名 日本倫理道德教育学会：第4回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原口友輝
2. 発表標題 「歴史と私たち自身に向き合う（Facing History and Ourselves）」によるワークショップ「アラバマ物語を教える」の検討 歴史的事例の学習を基にした道德教育を目指して
3. 学会等名 日本教育学会：第77回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

原口友輝「南京訪問記録 日中の相互理解を願って」『筑波大学道德教育研究』第25号，2024年，52-59頁。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------